

学位論文題名

チェコ社会における多極化とネーション形成

— 近代的「市民社会」の形成と体操運動 —

学位論文内容の要旨

本稿は、体操運動をはじめとする身体文化がチェコ社会のナショナリズムに与えた影響を明らかにすることを目的としている。

まず第1章では、本稿の視角について説明する。フランス革命によって成立した近代的「市民社会」においては、「市民(citoyen)」であることと「ネーション=国民(nation)」であることが、国家の分裂を生み出すほどの政治的対立を生み出さずに両立したと言えるだろう。ところが、こうした「西欧型」ネーションに比して、中欧では「市民」であることと「ネーション」であることが深刻な矛盾を引き起こし、結果として国家の分裂を生じさせたのであった。ハプスブルク君主国は、そうした「齟齬」によって崩壊した最初の国家となったのである。

その君主国の一部であったチェコ社会の場合には、近代的「市民社会」への移行期においてチェコ人とドイツ人という二つのネーション——ユダヤ人を含めれば三つのネーション——が登場し、最終的には社会を分裂させる方向に向かったのであった。本稿においては、体操運動を中心とする自発的結社に着目し、チェコ社会におけるこうしたプロセスの内実を明らかにしていくことになる。第1章では、その準備作業として、この社会におけるナショナリズムを幾つかの段階に分類し、ネーションの「分化」過程を概観する試みを行っている。

続く第2章においては、本格的な結社活動が展開されるようになった1860年代に着目し、当初は存在していなかったチェコ人とドイツ人の差異が「発見」され、明確化されていく過程を明らかにしている。19世紀末のプラハで生まれた歴史家ハンス・コーンは、この都市がチェコ人とドイツ人の二つの空間に完全に分断されていたと回想しているが、同世紀半ばの段階においては——少なくとも現在の感覚から見る限り——両ネーションの違いはそれほど明確ではなかったのである。1860年代初頭のチェコ社会においては、各種の自発的結社がネーション別に組織され始めていたが、多くの場合、チェコ系結社とドイツ系結社の関係はそれほど敵対的なものではなかった。だが、1880年代以降は、チェコ人とドイツ人の差異が明確に意識されるようになり、結社レベルにおける両ネーションの関係も悪化していったのであった。ここでの目的は、チェコ社会におけるチェコ系とドイツ系への「分化」過程を体操組織の事例から明らかにすることである。

第3章においては、体操運動における自己表象のメカニズムを探究していくことになる。

ここでは、チェコ系の三つの体操団体、すなわち、ソコル、労働者体操協会、カトリック系体操団体によって発信されていたナショナル・シンボルを比較検討している。19世紀末の大衆化の時代においては、チェコ・ネイション内部における社会的亀裂が明確化し、ネイション概念そのものは多義化していったと言えるだろう。だが、それぞれの勢力が自らを真にナショナルな存在と位置づけ、「正当性」争いをする中においては、ネイションの実在性についての疑問は発せられなくなり、不問のまま放置されていく。つまり、ネイションという概念そのものは多義化しながらも、ネイションという共同体が実体として存在するという感覚だけは強化されてしまうわけである。ここでは、体操団体によるナショナル・シンボルに焦点を当てることにより、大衆化時代におけるナショナリズムのこうした特質に迫ろうとしている。

第4章においては、体操運動における「我が祖国」の表象を扱う。交通手段やコミュニケーション手段が発達しつつあったとはいえ、19世紀後半においても、プラハを中心とするチェコ系多数地域のチェコ人にとって、後に「ズデーテン地域」と総称されることになるドイツ系多数地域は依然として身近な存在ではなかったのである。ところが、19世紀末より、ソコルをはじめとする各種の結社活動において、これらの周辺地域を「我が祖国」とし、そこに居住するチェコ系住民を「ゲルマン化の危険にさらされた我が同胞」と位置づける言説が積極的に発信されるようになったのである。ここでは、チェコ社会における「想像の共同体」の表象過程を体操運動の側面から明らかにしていくこととなる。

第5章においては、ユダヤ人の動向に焦点を当て、彼らの置かれた位置からチェコ社会を逆照射していきたいと考えている。19世紀半ばの段階では、多くのユダヤ人が、事実上ドイツ人に「同化」していたのに対し、チェコ系勢力が力を持つようになった19世紀末においては、チェコ人に「同化」するユダヤ人が増加し、チェコ系ユダヤ人とドイツ系ユダヤ人との間での対立が生じたのであった。さらには、ユダヤ人をいわば第三のネイションとして規定するシオニズムも登場したため、チェコ社会におけるネイション化（国民化）のプロセスは一層複雑なものとなったのである。ここでは「筋骨逞しきユダヤ人 (Muskeljudentum)」を志向するシオニズム系体操団体に着目し、彼らがどのようにして自己を規定し、何のために身体の鍛錬に向かったのかを探っていくことにしたい。

第6章においては、チェコ社会におけるオリンピック運動に焦点を当て、ナショナリズムとグローバリゼーションの関係について見ていくことになる。サッカーのワールドカップやオリンピックを見れば分かるように、現在においては、体操やスポーツを始めとする身体文化とナショナリズムの結びつきは自明のように思われている。しかしながら、19世紀末の段階においては、オリンピックにしても、サッカーにしても、ネイションを代表して戦うという意識は希薄であり、スポーツにおいてナショナリズムが露骨に表出されることは稀であった。第6章ではこうした点に着目し、チェコ社会における言説を中心としながら、グローバル化するスポーツがナショナリズムと結びついていく過程を実証的に追っていくことにしたい。

以上の考察により、チェコ社会における身体文化の全体像が明らかとなるだろう。特に、体操運動の拠点であった体育館は、幅広い階層の人間が出会い、お互いに語り合う一種の公共圏として機能しており、「大衆のネイション化（国民化）」において大きな意味を持っていたのであった。だが、チェコ社会において形成されていた公共圏は、当然のことながら単一のナショナルな公共圏ではなかった。ネイション毎による公共圏、そして階級や宗

教に基づく公共圏が成立し、それらがせめぎ合う中でチェコにおける「近代社会」が成立していったのである。その意味では、19世紀後半において現出していたのは、ハーバーマスの言う理想的な公共圏ではなく、多種多様な利害やイデオロギーが並存する「複数性の公共圏」であったと言えよう。チェコにおいては、こうした公共圏の複数性が社会の「柱状化」をもたらし、共に「市民社会」的方向を向きながらもネーション別に「分化」してしまふという結果を生み出したのであった。体操運動をはじめとする身体文化系結社は、広範な層を公共圏に引き入れ、彼らを精神的・肉体的に「市民」へと「改造」する一方、彼らを複数の公共圏に分断させてネーションの「分化」を生み出す役割も果たしたのであった。その意味では、こうした結社は、「市民」と「ネーション（国民）」の「齟齬」を生み出すうえで鍵となる立場にあったと言えるだろう。本稿が明らかにしようとするのはこの点である。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 田 口 晃

副 査 教 授 古 矢 旬

副 査 教 授 林 忠 行 (スラブ研究センター)

学 位 論 文 題 名

チェコ社会における多極化とネーション形成

— 近代的「市民社会」の形成と体操運動 —

本論文はチェコ人の体操運動「ソコル」に関する日本では初めての纏まった 専門研究である。19世紀末から20世紀前半のチェコ人のナショナリズムは文化的、政治的にドイツ人と対抗しながら形成されたものであるがその中核となったのが、実はこの体操運動「ソコル」なのであった。ところが1939年のナチス・ドイツによる併合の際強制解散されて以来、1989年まで禁止され続けた為、国際的には知名度が低くなっていた。それを再発掘し、さまざまな新解釈をほどこしたのがこの研究である。

最初に研究が展開される大枠と成る概念の整理がなされ、チェコ・ナショナリズム生成の全容が概括される。ボヘミア・モラヴィア地域の近代化過程で発生して来たチェコ人「市民社会」=様々な自発的結社の形成、その中での諸集団の大衆組織化=「柱状化」の進展、階級を超えた「公共圏」の形成といった枠組みの提示がそれである。

この論文の特徴はそうした概念整理よりも、個別の事象や事件の丹念な追求にある。ここでは、ドイツ系の体操運動からチェコ系が民族性に目覚めつつ分化して行く過程から始まってカトリックや社会主義労働運動と対抗しつつナショナルな自己形成を進める「ソコル」、あるいはチェコ人少数地域への働きかけを通じた「ソコル」による国土観念の培養、一転してソコル運動のとドイツ人体操運動の狭間に置かれたユダヤ人の体操運動に着目しつつ、ソコルとチェコナショナリズムの台頭に側面から光を当て、最後はオリンピックへの代表権を廻る紛争をチェコナショナリズムと体操とスポーツの分岐と絡ませるなど、実に様々な角度から「ソコル」運動とチェコ人のナショナリズムに多様な光をあて、その特徴を多面的、立体的に浮かび上がらせることに成功している。

取り分け以下の三点が評価に値する。第一は史料の収集、分析である。史料の発掘収集

と整備はチェコでもまだ余り進んでいないという状況の下、プラハの公文書館の他、様々な文書館、さらにはソコルの地方支部も廻って、発掘・収集に努めた成果が、周到かつ適切な史料批判、史料操作を通じて、本論文にはよく生かされている。

第二にテーマの独自性である。本研究は身体文化とナショナリズムの関連に着目しており、歴史研究の着眼点として新しくかつ独特のものと言えよう。確かに従来もドイツ体操とドイツナショナリズムの研究等はあったが伝記研究も含めいずれも比較的単純な視点からのものであった。それに対し本論文は最近のナショナリズム研究、身体論研究を踏まえた上で、多角的にこの問題に接近している。その結果、一方ではこれまでの体操・スポーツの狭い専門研究を撃ち破る広い視座が与えられると共に、従来のナショナリズム研究に往々見られた底の浅い断片的な文化研究とも異なる、独自の広がりや厚みを備えた成果を生み出した。

第三に、従来の政治家や政党中心の政治史では捉えきれなかった政党や政治集会などの基底にあってそれを動かしている半ば政治的若しくは非政治的な組織と運動の実態が、体操運動に即して具体的に明らかにされている点が評価に値する。所謂社会史では捉えきれない社会と政治の連関する領域であり、政治史から言えばこれまでの表層の政治史から深層の政治史に踏み込んだ研究と言ってよい。外国研究でここまで深く対象の中に入り込んで把握した力量と成果は高く評価できるのである。

国際的に見ても、またチェコ本国の歴史研究と比べても一頭地を抜く第一級の水準にあり、英語等外国語で公刊されればその評価が広くかつ適切になされ、高い評価を勝ち得ることは疑いない。できるだけ早い外国語による出版を期待したい。

強いて指摘すれば書き足りない部分が幾つかある。既発表論文4本に新たな論文1本を導入部とした構成になっており、結論部分がまだきちんと書かれていない。内容上は過度に禁欲的で、専門的でない読者に対して不親切な箇所（例えばソコルの通史的概観がなされていない）、あるいは視界をもっと広げると説得力が増すのに筆を惜んでいる箇所（ユダヤ人問題や体操とスポーツの関係の箇所）が若干見られる。とは言えいずれも論文全体から見れば瑕瑾とするには及ばない。

以上、審査員全員本論文をもって博士号授与に十分値するものと判断した。